

小池文英先生の追悼

福 屋 靖 子

小池先生におかれましては、頸部癌のため、7月24日、約一年に亘る闘病の末、享年69歳の御年で、御永眠なされました。この非情なる訃報に接し、痛恨の極みでございます。

先生は、名実共に、わが国のリハビリテーション事業の育ての親であられました。故高木憲次先生の療育の理念を実践し、整肢療護園をそのモデルに実証することによって、肢体不自由児のリハビリテーション事業を全国に普及なされた御功績は、真に偉大なものがありました。

私が整肢療護園に就職した昭和36年当時は、今の理学療法士・作業療法士という言葉すらなく、リハビリテーションという言葉もめずらしい時代でしたが、療護園では毎週リハビリテーション・カンファレンスを行っていました。小池先生は、当時病気がちの高木園長の副園長として、内外共に非常に御多忙にもかかわらず、その司会をなさっておられ、そのメンバーも、医師、看護婦、ソシアル・ワーカー、心理担当、児童指導員、職能担当、保育担当、言語治療士、克服指導員（現在のPT・OT）、教師などに亘っており、子供がリハビリテートしていく上での問題を真摯に検討されている先生のお姿が目に見えます。毎週行われる勉強会でもリーダー・シップをとっておられ、そしてその博識にもかかわらず、いまだ絶えざる勉強への姿勢が同われ、衝撃を受けたことを覚えております。当時でも療護園では日本の専門誌はもちろん、その他10冊位の外国の専門誌を購入しておりましたが、先生はそのすべてに必ず目を通されると、もれ伺い、専門の世界の厳しさを教えられました。

療護園には、実に多くの見学者、研修者が訪れていました。先生は訪問者に丁寧に講義しておられ、リハビリテーションの理解者を一人でも多くふやしたいというお気持ちが、今になって痛ほど伝わってまいります。その結果として、先生のお話、療護園の実践に感銘を受け、理解を深めた人は全国に数多く、また、先生のお教えを受けた多くの専門家が、リハビリテーション業務に従事するようになったのです。

先生は、国内のみならず、国際的にも、日本の代表としての大きな役割を果たしておられました。昭和40年の

第3回汎太平洋リハビリテーション会議がわが国で開催され、成功をおさめられたのも、小池先生達のそれまでの実績とお力があったためと高く評価されております。

先生は、PT・OTの専門職の必要性を機を見つけては説かれ、また国に対しても要請しておられました。私は昭和34年、学生の頃、整肢療護園に見学に行き、先生にはじめてPT・OTの説明を受けました。そして、あなた達こそPT・OTになって下さい、と云われ、黒板に大きくPT・OTと書かれた文字が今でも私の脳裡に焼きついております。私は、小池先生こそPT・OTの生みの親であると信じております。

先生は単に医療の枠のみではなく、教育面にも力を尽くされました。養護・訓練制度および教育界に広められた成瀬理論を真正面から受け止め、冷静に批判し、医療への誤解を解き、相互理解を深めようとされた、いわゆる、小池・成瀬論争*は、チーム・ワークの重要性を教育界にも再認識させる役割を果たしたと思いますが、これは、小池先生にしてはじめて可能なことだったものと思っております。

先生の御人徳は、私が今さら申し述べるまでもなく知れ亘っているところですが、決して自らを飾らず、どんなことでも自ら実践され、そして暖かな人間愛に満ちた抱擁力のある方でした。

今、私達は、敬愛する偉大な指導者を失って、悲嘆にくれております。今では、先生の目指しておられたものを見失わないように、模索しながら頑張っていくしかなくなってしまうかもしれません。この悲しみを克服して、PT・OTを真に専門職として育てることが、先生の御遺志にそうものであると自覚しております。

先生に賜りました数々の御教導、御恩情を心から感謝申し上げます、謹んで御冥福をお祈りいたします。

*「肢体不自由教育」誌、第14号（昭和48年3月）から第18号（昭和49年3月）までの一年間に亘って掲載された小池文英・成瀬悟策先生による「養護・訓練」に関する紙上討論。後に「脳まひ児 養護・訓練の諸問題」（林 邦雄・村田 茂編、慶応通信、1977）にも転載された。本誌14巻9号（1980年9月号）、617-642頁にも一部、転載された。

（筑波大学社会医学系 理学療法士）